

みなそこ

水底に揺れる光よ

神野麻郎

黒いウェットスーツに身を包み、頭にはフードを被り、水中眼鏡と足ひれをつけて息を止め逆さまに潜行していく自分を、直紀は異形の魚だと思う。海底に着けば岩のまわりを不器用に遊泳し、ほんの一分半ほどでどたばたと浮き上がらねばならない奇妙な魚だ。その一分半ほどの間に、岩の上や岩間にへばりついた獲物のちよつとしたゆるみを狙って、ノミをさし込みへぎ取る。一度し損なってしまうともうアワビは身を固めて梃子でも動かないが、このごろではそんな失敗はめつたにしない。このあくまで地味で鈍重な生き物をかすめ取り、異形の魚は海面へと馳せ戻る。海面に揺れている波、光の波。苦しい息で戻る時、いつもその波の向こうには何か輝かしい別世界があるような気がしている。だが潮水を吹きながら海面から頭を突き出し、荒い息をついているうちに異形の魚は魚でなくなり、自分が魚であった間もこの世界には何の変化もなかったことを知る。変化があるどころか、いつものようにこの世界は相変わらず自分にはまるで無関心な顔をよそおっている。空虚になって波のまにまに浮遊している樽に近づき、下に垂れ下がっている網袋スカルに獲物を入れる。まるで誰かの遺失物を拾ったようなぐあいに。その黒っぽい遺失物たちは網の中でたがいにくつつき合い、一つの塊になって自らの運命の転変も知らぬげにまるで落ち着いている。網は水中でもだいぶ持ち重りがするほどになっている。

水の膜の張った眼鏡越しに、少し離れた所に揺れている船の上で道夫さんが手を振っているのが見える。上がれと合図しているのだ。真正銘の海拔ゼロメートルから空を見上げるとたちまち中天から光の矢に射られる。もう真昼なのだ。直紀はとたんに空腹をおぼえる。オレは今朝は狂ったように潜っていると思う。どうしてだかわからないが、自分で自分の身体をいためつきたい気分だ。こんな気分はいつだってだしぬけにやってきて、オレの心をよっぽど踏み荒らしていくのだ。それをうまくやり過ぎすべが、オレにはまだよくわからない。

樽の上に乗ってゆっくり足を打ちながら船に近づく。艫の方から船に上がって急に重くなった網袋を持ち上げ、外し、潮水を垂らしながら運んで、獲物を船の胴部の生け簀に活ける。ウェットスーツを脱いで天幕の下に乾しておく。頭からバケツの真水をかぶり、汗と潮水で濡れた身体をタオルで拭いた。

「こない暑うてはなあ。まだ海ん中のほうが楽じゃな、ナオ。——おい、その茶アくれ」直紀は黙ってそばの水筒を手渡す。天幕の下にあぐらをかいた道夫さんは、さえない顔であらぬ方を見やりながらもう握り飯をほおぼっている。また夫婦喧嘩をしたのにちがいない。道夫さんが変な恰好に海苔を巻いただけの握り飯を持つてくる日は決まってそうだ。四

人いる子供たちを尻目に、夫婦がヒステリックに言い争っている場面は想像しやすい。道夫さんはちよつと間の抜けたところのある好人物でふだん夫婦仲はよいほうだが、時々喧嘩もやらかす。奥さんの民子さんが強気に出るのは、道夫さんが養子のせいでもあるらしい。でもふだんは暢気にかまえ、それでいて漁場に出ればよく稼ぐ道夫さんが直紀は嫌いではない。去年の春、直紀が水産高校を卒業して島に戻り、見習いもかねて道夫さんの船に乗せてもらってからもうだいぶ経った。

「ナオ、おまえ、タケルと洋子のこと知っとるか？」

食べ終わった後で一服うまそうにつけながら、道夫さんが訊く。

「知らん」と直紀はぶっきらぼうに答える。

「知らんゆうて、おまえ洋子といっしょになるつもりとちやうんか。ほれやったら早う決めたほうがええぞう。あんな、ワイもようは知らんのじゃけんどな、武一ぶいちさんが洋子の親に洋子をくれとゆいにいったそうじゃ。ほれもタケルが武一さんに頼んだんじゃとゆう。今は青年会長やしとるけんど、あいつはあかん。こすからい、食えん奴じゃぞ。あんなタケルやに負けたらあかんぞう、のう、ナオ」

そう言われても、直紀の中には道夫さんの調子に合わせていく気が動かなかった。洋子との結婚なぞ考えたこともない。たとえそういうことがあるとしても、まだまだ先のことだ。二人ともまだ二十歳になったばかりなのだ。それにそんなウワサだって、いつものことどころかに誇張が混じっているにちがいない。ほんとうは、漁協の専務をしている武一さんが組合の購買部にいる洋子にちよつと冗談を言いかけただけかもしれないのだ。ニュースの乏しい島には常に人数だけの拡声器がある。直紀にはタケルさんの嫁になる洋子の姿など想像できなかつた。

道夫さんは天幕の陰に寝ころんでラジオをつけた。聴きながらしばらくとうとするつもりだ。ラジオはニュースが終わって「昼のいこい」になるらしい。直紀も聴くともなく、隣に寝そべる。沖の水平線の方を見るともなしに眺めると、紀伊水道のはるかな沖に大きなタンカーが浮かんでいる。大阪あたりに向かっているのだろう。あの巨大な腹には、アラビアの砂漠の下から吸い出されたままの黒い原油がたっぷりぶちこまれているにちがいない。アラビアか、アラビア、アラビアと直紀はその言葉を頭の中ころがしてみる。砂だらけの世界、隊商、ラクダ、オアシス、アラビアンナイト、月の砂漠——そんな月並みな連想からは詩の言葉は生まれてきそうもなかつた。この不規則に揺れ、暑気が肉や骨までをとろかしそうな場所から一八〇度も転回しなければ、詩の言葉など生まれてきはしないのだ。海のことを書こうとすると海は逃げていく。島のことを書こうとすると島は逃げていく。下宿をしていた高校生の間はまだほどよい距離があつてよかつたが、漁師の生活をしながら海や島を詩の言葉にからめとるのはかえってむずかしい。

詩誌「かーまる」の同人たちが島で遊んでいつてからもう十日余りが経つ。その余韻はまだ島のあちこちにくすぶっていて、時に目でそれを追い求めている自分に直紀は気づく。夢想の中では成熟した裸の女が直紀をからかうように海辺で跳びはねている。だが夢想から

さめれば、そこは波がけだるく寄せているだけの何でもない浜にすぎない。たしかに目に焼きつけられたはずのその白い裸身はしだいに実体を失っていき、そんなことなど現実にはなかったような気もしてくる。その女の、近々結婚することに決めたという便りを読んではならぬおさらそうだった。それにしても、女はなぜオレなんかにそんなことを知らせてきたのだろう。

「さあナオ、午後の部じゃ」

うたた寝していると思っていた道夫さんがむっくり起き上がった。「おおっ」と答えながら直紀も起きて、船の揺れに身体の動きを合わせながら、夏にはどうにも暑苦しいウェットスーツをまた身にまとった。

海に飛び込むとまた地上とはまったく別の、光を融かしこんだ青い世界だ。息を止めてまた異形の魚になる。足を打ちながら落ちていくのだが、逆さまなので海の底が天上で空の方が地面のようでもある。海藻が逆さまに揺れている。その間から岩肌とみまがう鈍重な生き物をすばやく見分け、腰のノミをかまえる。たゆとう青暗い水はやや冷たい。

夜の島はまだ熱気に冒されている。闇の空からこぼれ落ちてくる風は、地上に達するまでには息絶えてしまうようだ。南からの風はたいいてい、本島とは瀬戸を隔てて立ちはだかつている前島の背にぶち当たって死んでしまう。台風と冬の季節風を避けて、狭い窪地に建てられた家々は、だから海のそばにもかかわらず熱だまりの中にある。島びとたちは家じゅうの戸や窓を開け放し、また下着や浴衣姿で集落のぐるりのほぼ半分を取り巻いている堤防の上に出て涼をとる。港の波止では子供たちが竹竿を並べ、水銀灯の灯りに回遊してくる小アジを釣り上げている。

堤防の上でちよつと涼んでから、直紀は青年会館の方へ歩いた。荷車がやつと通れる幅の路地には、その両側の家々からもれる雑多な音がからみあっている。テレビの少女歌手の声、子供を叱りつける声、泣き声、食器を洗う音、風呂場で湯をつかう音……。この濃密さ、猥雑さはオレの子供のころとまるで変わらない、昔と同じだと思えて、時が永久に停止したような錯覚に直紀はとらわれる。この島は百年こんなふうだったにちがいない、そして百年後も、世の中の変化をよそにちよつとも変わらないのではないか。うんざりする。手押しポンプの取り付けられた共同井戸の前は小暗い。その中で一人の女が今ごろ尻を落として洗濯をしている。どうしたのか。夫婦喧嘩でもやらしたのか。金だらいから跳ねとぶ水、うずくまった女の痩せた背中、怒ったような横顔、乱れた髪。直紀は顔をしかめ、その化石したような姿に何か呪いの言葉を投げつけてやりたいような気分になる。

その井戸から少し奥まった所に、堤防を背にして四棟の教員宿舎が立っている。それをちらつと目にするとう今でも直紀の胸は少しうずく。四年前まで湯川先生が住んでいた。三つの家から灯りが漏れている。でも教師たちもほとんど住み変わってしまい、今の先生たちには会っても会釈をするくらいでろくに話したこともない。

青年会館の明け放たれた戸口から入ると、蛍光灯の点った三十畳ほどの部屋に男女がい

くつかに分かれて坐って話したり歌を歌ったりしている。浴衣を着て団扇を動かしている者が多い。窓はすべて開け放たれ、数台の扇風機も回っているが、蚊取り線香のにおいに混じって風呂上がりの娘たちの安っぽい香水や髪油におう。いつものように娘たちに取り巻かれながらギターを弾いているのは歌の上手な勝美さんだ。そこから少し離れて五、六人の男女が集まっているところで、もう一杯入っているらしいタケルさんが何やらわめきたて、笑いが起こっていた。

直紀は部屋の奥の方にいる同級の一郎と泰助のそばに寄っていった。「おう」と一郎は手招きして、

「今日はあかなんだわ。光雄さんが去年ようけ獲ったってゆうけんゼニバエのところでやっただけんど、おらん、おらん。アカを十ばいだけじゃ。なあんももうけにならなんだが。どうじゃ、おまえのほうは」

言いながら一郎は探るような目を向けてくる。いつもそうだ。通った高校はちがったが、二人とも去年の春に島に戻ってきて同時に漁の見習いを始めた。以来、一郎は直紀を何かとライバル視してくる。周囲の大人たちからも新人たちは何かと比較される。しかし直紀のほうはそんなことにはまったく関心がない。狭い島のたった二人の間でそんなことにこだわっていてもしょうがない、世の中はもっと広いのだと思っっている。

でも一郎に限らず、島の漁師は誰でも、それとなく、あるいはあからさまに、他人の漁獲を気にしている。漁協のメンバーとしては皆協力し、助け合うのだが、それぞれの漁となるに限られた資源を競争で取り合うわけで、皆生活をかけてしのぎを削る。貝獲りも釣りや網の漁師もそうだ。その点では漁村もいわば個人商店が集まっている商店街のようなもので、自分の店の売り上げも他人の店のもうけも両方気になるのだ。

一郎のほう挑んでくるので、会えば多少腹を探り合いながら漁のようすを言い合うことになる。一郎は、今日はあかなんだ、アカ十ばいだけだったと言うが、その上機嫌から見ても、それなら今日はサザエを主にやったのだろうと勘繰りも入る。事実、先月分の伝票整理の時も、一郎は日ごろあかん、あかんと言っていた割にはサザエでかなりの水揚げを記録していたのだ。

「今日はまあまあや」、直紀はあたりさわりなく答えた。

「黒崎のハナでやったんじゃろ？ ナオの奴今日はようもうけたぜー、って道夫さんがゆうとったわ。なんぼじゃ？」

「アカ三キロにクロ五キロじゃ」

「うわあ、ごっついの一」と一郎はひっくり返ってみせた。起き上がると、

「泰助はな、今日は十五キロやぞ。びっくりするじゃろ？ 三ヒロの深さのところに金はいっぱい落ちとるけんあ。なあ、泰助」

からかわれても気弱に笑っているだけなのが泰助だ。二人よりは一年遅れてこの春から島に帰って潜りはじめた泰助は、体質なのか耳抜きに苦労して、まだ一人前の潜りができない。それで浅い所で主に値の安いサザエを獲っているのだ。

泰助は島の中学を直紀らといっしょに卒業した後、神戸の方で親戚がやっている潜水器船に乗って潜水夫の見習いを四年もやったのだが、とうとうものにならず、島に帰ってきた。それも上回りをしている時に自分のせいで何やら人命にかかわる事故を起こしかけ、きつく怒られて追い返されたのだといううわさもある。泰助はもともとぼんやりした性質の上に身体も弱くて、海の仕事には向いていないのだ。しかし皆に何と言われようと、島でサザエでも獲って食べれば食うだけは食うていける。何も同い年のオレたちまでが泰助をからかうことはないのだ。

「ナオ、今夜は洋子、来んのか？」

タケルさんが大きな声で言いかけてきた。タケルさんのそばにいる二、三の娘が直紀を見て含み笑いをする。

「知らん、そなん」と直紀は突き返す。

「あーら、黒い顔、朱うして。まだまだうぶやなあ、ナオちゃんは」

女の方では年長の美咲が油を注ぐ。また嘔いが起こる。娘たちが直紀のほうを見ながらささやきかわす気配を気にしながら、直紀は顔を伏せているだけだ。洋子か、何だあんな奴、と思っている。道夫さんの話がほんとうで、タケルさんが洋子をもらいたいというなら、ちよつと気になるところはあるが、ああそれもあたりだと思っただけだ。

「怒るな、怒るな」と言いながらタケルさんは三人のそばまで近寄ってきた。そして、部屋中を見回しながら、大声で、

「あー、ちよつとな、男はこつちへ集まってくれんかー。相談したいことがあるんじやあ」と青年団長らしいきまじめな顔になって、他の七、八人の男を手招きする。「なあんじや」、「つまらんなあ」と言いながら娘たちは部屋の隅に寄る者もあり、出ていく者もあった。

タケルさんの相談というのは秋祭りか全町運動会の準備のことかと思つたが、そうではなく漁場の見廻りのことだった。この夏また密猟がふえているということとは直紀もこのごろよく聞いている。直紀はまだ実際に会ったことはないが、島の周辺に出没してアクアラングを使ってアワビを獲っていく怪しからん連中がたしかにいるのだ。夜間に多いという。一人や二人ではなく、多い時は四、五人もやっていて。ヤクザみたいな奴らだったという者もいる。二、三人程度なら島の漁師で引つつかまえるなり何なりできるが、人数が多いと容易にはかまえない。島には警察もなく、海上保安庁の船は二十キロも離れた港に旧式のが一隻いるだけでとても間に合わないし、たとえ間に合つたとしても密漁船の速い逃げ足には追いつけない。強気に出て殴り合いの喧嘩にでもなつてしまつて怪我人も出、場合によつてはこちらが罪に問われることにもなる。そんなことが過去にもなかつたわけではない。

毎年のように問題になることで対処しかねているのだったが、今年は、操業の邪魔にはなるが見廻りの体制を強化して、捕まえる時も連絡を取り合つてできるだけ大勢であたることを海士たちは申し合わせようとしていた。その具体策を含んだ申し合わせは海士会で決まるのだが、青年団としてもあらかじめ意見を取りまとめおく必要があるとタケルさん

は言うのだ。

主に年長の者たちがあまだこうだと言いつ合っている時に、洋子が友だちの美智代といっしょに入ってきたのを直紀は目の端に留めた。風呂上りらしく、髪がまだしっとりとして浴衣の顔が上気している。そばの一郎が脇腹をこづいてきたが、直紀は知らぬふりをした。話し合いはよく脱線しながら一時間近くも続いたが、タケルさんが、

「ようし、皆の意見はようわかった。オレがまとめて会長にも報告しとくけん」と引き取って終わった。直紀が会館を出ようとした時、一郎が、

「明日はどないするんじや。オレは明^{あきら}さんと街に飲みに行く。一緒にどうじや。泰助も行くんぜー」と訊いてきた。

明さんは四つ年上の、一郎の兄貴格だ。休日には仲間の船で街に出てよく遊びまわっているらしい。

「おまえも行くんか？」と直紀は泰助を見た。泰助は答えず、にやにや笑っている。代わりに一郎が小声になって、

「ほうじや。明日は泰助の筆おろしじや。ほなけん、おまえもどうじや。まあ、おまえはもう洋ちゃんにでもろたんじやろけんどなー」

一郎のにやけた口と目のまん中あたりに、直紀は拳を叩きこんでやりたかった。

青年会館を出て直紀は家に帰るふりをしたが、誰の目もないのをたしかめると路地を折れ、山すその道を学校の方へ歩き、運動場の間に身体をしのびこませた。足音を抑えながら運動場を横切り、ゆるい上りの細道を保育所の方にたどった。家並みからはずれた山のそばにある保育所は灯りもなく闇に沈んでいる。港の方から花火の上がる音がして、わずかに人声も流れてきた。

塀のかげに身を隠し、たちまち襲ってくる蚊を気にしながら直紀はライターで煙草に火をつけた。一本吸い終わるころ、直紀が来た道とは反対の方からサツサツと地の擦れる音がした。それがだんだん近づいてくる。直紀がその気配を見守っていると、白っぽい姿が浮かび、「ナオ、ナオ」と押し殺した声がする。声は少し震えている。「ここじや」と手招きする。洋子はそばに来ると、

「蚊取り線香、持ってきたんよ」と直紀に渡した。

「こないだは、お尻や脚やいっぱい咬まれてしもたけんな」と笑った。

この前と同じように、外廊下の踏み板の上に洋子を仰向きに寝かせる。浴衣のえりに手をすべらせるとたやすく乳房がこぼれた。直紀はそれを吸いながら手を腿の間に移す。荒い息づかいの洋子も直紀の股間を探り、慣れたように手指を使ってくる。まわりに三カ所もつけた蚊取り線香がけむたい。コオロギがすぐそばで鳴いている。そのうちに洋子の肩をつかんでいた手に急に力が入り、直紀は果ててしまう。

これだけのことだ、と仰向いて寝そべった直紀は思う。高校時代の下宿での戯れが島に帰ってからも続いていた。洋子はまだ処女だという事実が、直紀にいくらか免罪符のような気分を与えている。洋子がもう以前のようには恐怖を口にせず、十分受け入れるつもりになって

いることは直紀にもわかっていった。しかし直紀は湯川先生への思いにこだわっていた。今も洋子には悪いと思いつながら、湯川先生を抱いているような錯覚を楽しんだのだ。だから前からの習慣のままに洋子を処女のままに置いてやることで、かろうじて洋子の気持ちを踏みとじらないでいられるような気がしていた。でもそれは自分勝手な言いわけにすぎないこともわかっている。湯川先生は結婚するんだ、だからオレももういいんだと考えたりもする。身じまいをして踏み板の上に並んで坐ると、洋子は直紀の手を取りもてあそびながら小聲で急に多弁になった。今日組合であったこと、身近な人たちのうわさ、今度友だちと街に出かけたら何を買いたい……。聞き流しながら、直紀は洋子のこれからの想像する。洋子もだんだんごくふつうのこの島の女になっていくだろう。納屋で網をつくろい、頬かむりをして狭い段々畑を耕し、天秤棒で水や下肥を畑にかついでいってイモやタマネギやスイカを作るだろう。法事があれば手伝いに呼ばれ、だんだん心経も唱えられるようになる。さつき青年会館へ行く途中で見かけた不機嫌そうな洗濯女の姿が重なった。そしてオレもごくふつうの島の漁師になる。

頭上の空を時おり白い道が旋回する。山の灯台の光だ。それは雨の日も風の日も吐き気を催すほど規則正しく、無表情に島の夜空を支配し続けている。

同人誌「かーまる」十八号からぱらっと落ちた一通の手紙。直紀の詩二編の簡単な批評。七分の賛辞と三分の注文。その後に行空けてさりげなく、「結婚することになりました。先生ももう二十九歳です」。相手は……。あの男に決まっている。

去年の晩秋のある休日、「かーまる」の月一度の例会に初めて参加した時のことを直紀は忘れもしない。直紀は高校時代、まるで不人気だった文芸部に柄にもなく所属して詩のようなものを書き散らしていた。島の中学の時担任だった湯川先生の影響で、高校に入ってから直紀は書き溜めたものを島に帰ると先生を訪ねて見せた。先生が転勤で島を離れてからは時たま郵便で送った。先生が褒めてくれたものを、高校生向けの雑誌に投稿し三度ほど掲載されたこともある。卒業して帰島してからも詩はノートに書きなぐってたまに先生に送っていたが、ある時先生から手紙で、自分たちの同人誌グループに参加したらどうか、刺激になるよ、まずは見学に来なさいと勧められ、直紀は多少気負いながらその合評会に出てみたのだった。

県庁のある街の駅前で湯川先生と待ち合わせ、簡単な昼食をいっしょに摂った後、先生に連れられてアーケードのある通りをしばらく歩き、そこから一筋裏に入った所にある喫茶店の二階に上がっていくと、大きなテーブルを置いた小部屋があつて、すでに七、八人ほどの男女が集まっていた。若い人が多かったが、皆直紀よりは年上のように思えた。同人たちはそれぞれ自由な服装で好きなポーズで掛け、飲み物を前に置いていた。喫煙する人が多いようで、煙草の煙が層をなし、小さな換気扇は追いついていなかった。

立ったまま湯川先生が簡単に直紀を紹介したが、先月出た最新号の作品の合評がもう始まっているらしく、同人たちは会釈をしたりしなかったり、少し直紀に注意を向けただけで

すぐ会話に戻っていった。長髪で痩せた黒縁眼鏡の男がさかんにしゃべっている。それを聞いている他の同人たちは一様に不機嫌そうな顔つきで、直紀はちよつとたじろいだだが、湯川先生は、気にしないで、いつものことなのよ、というふうに直紀にうなずき、ここに、と自分の隣の席を示した。

それから三時間というもの、同人たちの批評や議論は直紀という存在をまったく置き去りにしたままで四方八方に飛び散った。先生から送ってもらった最新号の作品について直紀も多少感想は準備してきていたのだが、口をはさむすきがなかった。たとえば、痩せた黒縁眼鏡の男がこんなふうにするのだ。

「前半のね、「冬野を一人歩けば 立ち枯れたスキの群れ けれどもみなの死滅とは言うまい 土の下の温もり 牧夫は草を刈る」……、陳腐じゃないかなあ、こんな表現は。戦前の四季派の流れではあるが、古すぎるね。ここに見られるような自然に対する伝統的共同体的な感情なんてものは、戦後詩の試みの中でとくに清算されてしまったんだよ。今や真に共同体的なものなんて、どこにある？ 意識を先鋭化すれば、そんなものはどこにも見つからないはずだよ。あるとしたら虚偽か疑似的なものでしかない。ぼくらはそんな似非共同体的なものから始めるのでなくて、それぞれの個の現実から始めるべきだよ。厳しくこの社会の現実の中に置かれた自己の意識無意識を問うところからね。そうすればこんなあまつちよろい表現は出てこないはずだよ」

ちよつとエキゾチックな顔立ちの女が足を組んでタバコを指にはさんだまま言う。「○○君の言うこともわからないではないけど、でもあたしはこんな表現好きだなあ。ノスタルジックで、ひびいてくるところがあるよ。○○君の言うように、厳しく自己の意識無意識を問うとか、伝統的共同体的なものを拒絶するとか、そうしたことは戦後詩がさんざんやったことじゃないの？ その苦闘の詩史的な意味はあたしも認めるけど、でもみんながその路線で行っていったい何が残った？ 観念や修辞のもてあそび、独善的な表現の累積、読者との乖離、だいたいそんなものでしょ？ そして現代詩が誰にも読まれない、仲間内だけの小さな文学になってしまったじゃないの。現代詩ももっと広く読まれなきゃ。だったらもう一度共同体的なものに立ち返ってみるのも一方法でしょ？ 共同体的なもの民俗的なもののなかに、今までの詩人たちが見逃してきたもの、とりこぼしてきたものがいっぱいあるはずだわ。あたしは、この詩にはそうした伝統回帰の積極的な主張が見えると思うわ」

またこうだ。別の詩について、会の進行役らしい長身で色白のハンサムな男が言う。「この「人をなぐる雨傘」とか「イヤリングが男を殺した」とか「獐猛なバス」とかの表現は、ちよつとおもしろいね。常識的な言葉のつながりや意味の流れを拒否して、反転させたり意外な言葉を組み合わせたりして、表現に緊張をもたらしていると思う。でも、それだけに終わっていないか？ 言葉や言葉の平凡な組み合わせの、いわば脱構築デコンストラクションを行っても、その後に残るものは何だろう。何か創造的なものが残るのだろうか。ぼくがこの「夜の雨のバスターミナル」を読んで考えさせられたのは、そんなことだね」

さっきの女がやつぱり煙草を指にはさんでいう。

「脱構築ねえ。まあ詩法としてはそうだけど、その詩法が成功しているかどうかだね。選択された言葉は、常識的通俗的、その意味で歌謡曲的ね。「夜の雨のバスターミナル」という題からしてすでに歌謡曲的だけど、これはたぶん作者がわざとやってるんでしょ？ そして歌謡曲的通俗的なものをひっかきかきまわして壊そうとはしてるみたい。でも壊しきれているかどうか。逆転、否定、はぐらかしは言葉遊びとしてはおもしろいけど、結局詩の全体として表現しえたことは、男女の心のすれちがいといった通俗的なテーマの範ちゅうから抜けられていないんじゃないかしら」

同人たちは男も女も猛烈に煙草を吸い散らす。直紀はしびれたようになった頭で、オレもポケットから出して吸ってやろうか、どうしようかと迷った。仕事休みに船の上でやる一服の快感をそのころ覚えて、ふだんも煙草を持ちまわっていた。でも直紀は、湯川先生はどう思うだろう、いやそれよりもぎこちない吸い方をして同人たちに嗤われはしないだろうかとつまらないところが気になった。そして頭のもっと深いところでは虚脱感で気が遠くなるようだった。かなわない気がした。オレなんかだめだと思った。同人たちの観念語や固有名詞を器用にもてあそぶ批評の言葉にまるで理解が届かなかった。詩は自分に近いもので、詩というものを自分は自分なりによくわかっていると思っていたが、そんな小さな自負はたちまち粉碎され、急に詩というものが自分から遠ざかり、見えなくなってしまったようだった。勉強不足だとも思った。詩について、詩の歴史について、詩の批評について、自分なんか何も知らない。

そして同人たちとの距離も思った。この人たちがふだんどどこでどんな暮らしをしているかは知らないが、皆一様にどこか街の雰囲気を身につけている。オレは今朝、島から連絡船に一時半も揺られ、駅で半時間も待ち、そして汽車に一時も乗ってやっとこの人口二十万の街にたどりついたのだ。この人たちと自分との間には、その道のりの分だけの距離がある。いまだに車も走らない島とそれなりに活気のあるこの街の落差の大きさ。オレの住む世界は狭く、足取りは重いが、この人たちはかるやかに広い世界を行き来している。

直紀は、その前日までに何度もその詩誌を手に取り、古畳に寝ころびながら真剣に感想を考えてそのページに書きつけ、問われた時にと思っただけの自分の考えもまとめたきたことの全部が無益で、こっけいだったような気がした。詩についての考えとは、たとえばこうだ。

〈ぼくは海が好きです。漁師をしていると、海そのものが詩を歌っているような気がする時があります。波の音や色、海中の魚や海藻の動きや光のゆらめき。朝焼けや夕焼け。時化の時の獰猛な海。それらをぼくはよく見聞きして、感じて、言葉に表してみたいのです〉
またこうだ。

〈ぼくは小さな島で生まれ育ちました。そして今もそこで暮らしています。いまだに車が一台もない、古井戸の水をまだ使っているような、社会的には遅れた島です。でも自然に囲まれた昔ながらの暮らしには、うまく言えないけど、何か人間が生きるということの根っここのよな、基本のようなものがあります。そこを詩に書いてみたいのです〉

長い時間の中で一度だけ、座が沈黙した時、湯川先生が、

「直紀君、あなたはこの詩についてどう思う？」と水を向けてくれた。直紀はどきっとして、あらためてそのむずかしい抽象語がちりばめられている一編に目をやり、自分にはよく読み取れないが、人間の心の深いところがよく表現できていると思う、といったことをしどろもどろになってしゃべった。それはあらかじめ考えてきたのとはほとんど正反対の意見だった。直紀の言葉に同人たちは何も反応しなかった。

会が果てて、同人たちは飲みに行くようだった。直紀は連絡船の時間を理由に皆と別れた。深い敗北感のようなものが続いていた。それに坂口という、会の進行役をしていたいかにもインテリらしい風采とものごしの男が湯川先生と親しそうなも気になった。

直紀はむやみやたらに島の中を歩き回る。周囲十数キロの小さな島だ。集落は南側のわずかな平地だけに固まり、ほかはおおよそ雑木の茂る小山の連なりである。直紀の足はそのいくつもの小山を踏みつけていって休むことを知らない。踏みつけられただけそこを屈服させたようなつもりになっている。猛々しい巨人にでもなったような気分だ。燈台の下へ出る、観音堂の庭へ出る、僧渡そうどが浜へ出る。どこへ行っても未知の場所はなく、それが直紀を苛立たせる。草が伸び、蟬の声と小便が落ちてくる山道、腐った藻の色をして同じ色の皮膚をした醜いカエルの棲む溜池、なおも敵機をにらんでいるような旧兵舎の屋根のこぼれた穴、路傍に散在する西国三十三番を模したという陰鬱な石仏の群れ。直紀の目はことごとくそれらを黙殺する。

小道から外れ、夏草を踏みしだき、雑木をへし折りながらやみくもに突進する。転ぶなら転ぶがいい、傷つくなら傷つくがいい。汗が噴き出たらだらと流れるが拭いもしない。この島でオレは生まれたのだ、と思う。この潮のにおいをたっぷり吸いこんだ土からオレの身体はできている。その成り立ちはこの草や木やトンボや蟬やミミズと少しもちがっていない、と思う。疲れ果てることで、直紀はまったくそれを了解する。島の土からオレはできている。だからオレはここにいる。その島の土は、身体は、この単純さを愛せと言う。ここで魚貝を獲り、それを売って食っていけ、おまえの親たちも祖父母たちも先祖たちも、皆そうして暮らしてきたのだと言う。しかし汚血のような土の色、新しいことなどここでは何も無い。ただ日々の天気、季節の変化にもろに左右されながら営まれていく島の暮らし。

やはりこんなふうにやみくもに歩き、そしてとうとう島を飛び出してしまったことが今までに一度だけあった。一年半ほど前、高校の卒業式を目前にひかえたころのことだ。休暇で島に戻っていたのだが、急に島を飛び出して知らない遠くのどこかへ行きたくなくなった。それで洋子にだけは旅に出ることを話しておき、家族には本土の下宿に戻るふりをしてそのまま汽車とフェリーと電車を乗り継いでまず大阪まで行った。古びた安宿で一泊し、次の日は新世界のあたりの劇場をのぞいたり通天閣に上ったりしてぶらついた。夕方、大阪駅から普通電車に乗った時には、もう旅費の持ち合わせが乏しかった。乗り継いだ普通電車の終点は名古屋で、親切な駅員に声をかけられ駅員用の休憩室で仮泊させてもらい、翌日は国道で

ヒッチハイクをして何とか東京までたどり着いた。その時にはもう疲れきっていて、しかたなく電話帳を引いて郊外で小さなプレス工場をやっている叔父に電話をかけた。叔父夫婦の所で居候をしながら五日ばかりアルバイトをさせてもらい、卒業祝いももらって、夫婦には島に帰ると言い置いたが、東京駅で電車の行き来を眺めているうちに北の方へ行く電車に乗ってしまった。もつと遠くへ行きたかった……。

急峻な崖を下って突き出た大岩の上に出るころには、直紀はもう疲れ果てている。意気は萎えてしまって、もう巨人なんかではない。見慣れた海原が歪んで見える。足元の下方に沖から寄せてくるうねりの波の一折れ一折れがそのまま直紀の身体の中にも入ってくる。そして直紀は、大岩のかたわらの波静かな入江と小さな砂浜の、その波打ち際のあたりに揺れ動く一つの裸身を見下ろす。

「かーまる」の同人たちが島に遊びにやってきたのはお盆の前ごろだった。あの初めて「かーまる」の例会に出かけて以来、直紀は休日に催される毎月の例会にできるだけ参加するようになった。彼らにかなわないという気分はずっと続き、合評や詩の議論は相変わらず苦手だったが、湯川先生の言うように聞いているだけでも勉強にはなるようだったし、それに馴れてくると同人たちも初め思ったほど取っつきにくくはなかった。学校の先生が多かったが、会社員も主婦も学生も医者も卵もいた。例会で議論は白熱しても、懇親会に流れて酒が入るとさかんに冗談を飛ばし合い、年下の直紀にも気楽に話しかけてくれた。何より、湯川先生に定期的に会えるのが嬉しかった。

雑誌には直紀の詩も少しずつ載せてもらえた。同人の中ではやはり坂口さんという人が中心的な存在で、「かーまる」の発行その他の世話をしていた。坂口さんは高校の先生で、いかにもそれらしい知的な人で、詩歴も長くすでに自分の詩集を持ち、中央の雑誌の何かの賞を受賞したこともあるらしかった。その坂口さんが直紀の詩を、海や島の詩はユニークだ、まだ粗削りだけれど磨けば見込みがあるとも言ってくれ、直紀は気をよくした。しかし坂口さんは湯川先生と親しく、いつもいっしょに行動している感じだった。二人は恋人同士だという人もあり、直紀はひそかに気にした。六月の懇親会の席で、毎夏行っている合宿のことが話題になり、この夏は直紀の齋島いらいまに行つて合宿しようということにまとまった。そして週末に、同人の中でも仲のよい七人ほどが連絡船で島にやってきた。

合宿といっても文学談は二の次で、皆は磯遊びや海鮮料理を楽しみ、夜は飲んで騒いで麻雀にふけた。ホスト役の直紀は、皆を島の最高所の灯台まで案内したり、道夫さんの船を借りて島を一周したり泳げる浜に連れていったりした。それにしても直紀の目に、夏の烈しい光の下で彼らの肉体もふるまいも何と貧相に見えたことか。船に乗っても落ち着かないようだったし、浜での遊びも子どもものすることと変わらなかった。日ごろ抽象的な言葉を弄して滔々と人間や社会や文学を喋々して飽きない彼らが、島の大きな自然の中ではまるで小さくたよりなく見えた。坂口さんも例外ではなかった。直紀は余裕をもって彼らを眺めていられた。そして湯川先生の前で、皆をリードして一人前にふるまえる自分が少し得意だった。

珍しく湯川先生が遊びに来ていることが伝わると、先生を知る島の青年たちが宿に先生を訪ねた。先生が島にいた四年の間の教え子で島に残っている者たちの中から誰からともなく話が起こって、一夜は旅館でにわかな同窓会になった。一郎や泰助や洋子も来た。先生は面映ゆそうでもあったが、大人になった皆の変わりように驚きながら笑顔ですごした。しかしかえって仲間という時、湯川先生はあまり楽しそうでなかった。笑顔なのだが、何か屈託を隠しているようだった。坂口さんとうまくいっていないように見えた。何があつたのか、島にいる間じゆう二人は互いにあまり口をきかず、それぞれがちがう人を相手に話したり冗談を言い合ったりしていた。

帰る日の昼過ぎ、皆は早めに近くの浜での泳ぎを切り上げ、港に帰ってきた。三日目ともなると、もう海と岩山のほかは何もない小島には飽きてしまったという気分も出てきた。昼食はもう浜ですませてきたので、民宿に帰って連絡船の時刻までまた麻雀台でも囲もうというようすだった。

皆が民宿の方へ戻っていった後、船をもやっていた直紀のところへ湯川先生が一人で引き返してきて、もう一度船に乗せてほしいと言った。斎島にももうしばらく来ることもないだろうから、もう一度よく見ておきたいのだという。直紀は喜んで先生を船に迎え、一度括りつけたもやい綱を外した。二、三分で船は再び港外に出る。よく晴れた暑い日で、海は深い色をたたえていた。オレンジ色のワンピースの水着の上に薄い上着を羽織っただけの湯川先生が胴部の天幕の下に坐って移りゆく景色を眺めている。その顔にはやはり少し憂いがあるようだが、直紀は舵をとりながらやつと二人だけになれたと単純に嬉しかった。借りた船の油代はちよつと気になるものの、よしまた島を一周してやろうと決めてスピードを上げた。

島の東側のハナを回る時までには少し荒い横波を受けたが、回りきつてしまふとおだやかな海だった。日曜日で、ほかに漁船は見当たらない。真夏の昼で、崎やハエの上に釣り客の姿もない。直紀たちがよく潜るあたりの浅瀬を注意深くゆっくり通り抜けた時、湯川先生が、「直紀君、あそこの入江でちよつと泳ぎたいわ」と指さして言った。直紀は船を小さな入江にすべりこませ、少しバックをかけて止めた。前後にアンカーを打った。

先生はゴーグルを付け、すぐ立ち上がって海に飛び込み、海面に浮かんだ。ゆっくり平泳ぎをした。直紀もTシャツのまま飛び込んだ。水は火照った体を心地よく冷やしてくれた。

一泳ぎした後、砂浜に坐った先生が、

「直紀君はもうすっかり一人前の漁師だね。先生、見直しちゃった」と直紀を見た。

「相変わらず無口だけど。いや、中学生のころはもつとしゃべったかな」

直紀はたしかに自分は無口なほうだと思っている。家でも仕事でも、日ごろの生活でしゃべるべきことがそれほど多くあるとは思えなかった。それに島の男たちはたいがい無口だ。そのうえたいがい不機嫌な顔をしている。島ではおしゃべりでちゃらちゃら笑っている男は軽く見られる。しかし中学時代、直紀は湯川先生とは何でもしゃべりたかった。友だちといっしょにたまたま教員宿舎に招かれてコーヒーなどをごちそうになった時も、いっばいし

やべりたかったのだが、面と向かうと変に緊張して言葉が出てこなかった。今も二人きりだということが意識されて、何やらそんな昔の気分がよみがえる。嬉しいのに適当で気楽な言葉が出てこない。

後ろも左右も崖や岩で、海面は明るいのだが砂浜はおおよそ日陰になっている。海で冷えて先生は寒くないだろうかと気になった。

「直紀君」と先生が言った。

「あなたがまだ中一のところだったかな。雑談していて、あなたにね、今一番してほしいことは何かって、私、訊いたことがあるわ。きつと何かあなたがよいことをしてくれたんだわね。そしたらあなた、何と答えたと思う？ 憶えてない？」

少しも記憶がなく、直紀は首を振った。先生は笑って、

「あのね、先生の裸が見たい、って小さな声で言ったのよ」

そう言うとき湯川先生は立ち上がって砂を踏み、海の中に入っていった。両膝が隠れるくらいの深さまで行くと、肩から足へと水着を脱いだ。それを砂浜に放り投げると、頭から水に躍り込み、抜き手をきった。直紀は浜に坐ったまま身体を硬くして見ていたが、ふと立ち上がり波に飛び込んで先生を追いかけた。つかまえると、岸まで抱えて戻り、砂の上に横たえた。皮膚の色も肉付きも洋子とはちがうと思った。その上に重なるうとすると、先生は、

「ああ、直紀君、そうじゃないのよ。こうして泳いでみたかっただけ」と両手を伸ばして拒んだ。直紀は驚いて身体を離れた。先生は起き上がり、水着を拾ってつけた。また直紀のそばに来て坐ると、言った。

「直紀君、悪かったわ。ほんとうに……。私、悪い先生ね。でもね、時々私、先生なんてやめたくなる時があるの。先生なんて呼ばれても、齢があなたより幾つ上でも、私には実はわからないことだらけ。人生も世の中も、詩のことも……。あなたの前で先生でいることが苦しい時があるっていうこと」

湯川先生はその抑えて少し震えていた声が、浜にはまだくぐもっているような気がする。先生が自分をからかったのだとは直紀には思えなかった。先生のふるまいや言葉をありのままに受け取り、そのうえで先生の気持ちを推し量ろうとした。しかしよくわからなかった。ただ、自分もそうであるように、湯川先生も一人の女として、一人の人間として深く悩んでいるのだということだけはわかった。

でも冷静にそんなふうと思うより、あの時の頭の芯が痺れたような感覚が今も強い刺激として残っている。今ふたたび目の前にあの裸身が現れたなら、オレはきつと強引にやっってしまうだろう、いや、あの時だってやろうとした、ずっと以前からオレは、先生の裸ばかり夢想していたのだから。

湯川先生を初めて教壇に見たころのことを直紀は思い出す。生徒たちにとって湯川先生は初め、きれいだがやや冷たい感じがした。ほかの若い先生たちのように、田舎びた子供たちと狎れあうのを拒んでいるように見えた。島の学校にはまず「僻地」での経験を積むとかで大学を卒業したての新任の先生たちがよくやって来る。中学生たちはその先生たちによ

くいたずらをしかけた。それはたいい悪意ではなく、興味や親しみのしるしだった。でも生徒たちのそんないたずらも教室でのへらざ口も、湯川先生にはあまり通じなかった。かえってそのために疎んじられるような感じを生徒たちは持った。直紀もその生徒たちの一人だったが、しかし直紀は先生のそんな不思議なところにもかえって惹かれた。そして授業中は先生の服の襟からのぞく肌や少し紅を刷いた唇が気になった。寝につく時は先生の下着姿を思い浮かべたりしていたのだ。

目の記憶と妄想はなお続くけれども、眼下のその浜に、今は何ものの姿もありはしない。

月曜の朝、直紀は港で船の用意をしている時、いつもよりやや遅く出てきた泰助に会った。泰助は直紀を認めるとはに cand だように笑ったが、すぐ顔をそむけた。昨日はどうだったのかとも直紀は訊けなかった。

その日は漁が少なかった。午前中、一昨日と同じ所でやってみたが、一昨日の半分も獲れなかった。潮の加減だろうと道夫さんは言い、早めに切り上げて船に上がった。すぐ直紀も上がり、ウェットスーツをもどかしく脱ぎ捨てて船の艙からせわしく放尿した。色の濃い尿が海面に散る。ウェットスーツは保温の点ではありがたいが、手足の先を除いた全身を覆うので生理現象には不便だ。道夫さんなどはもう慣れたものでスーツの中にやっってしまうが、直紀はまだそうできないでいる。いつも慌ててスーツを脱いであるので、道夫さんには笑われてしまうがしかたがない。

午後は船をマナイタバエの近くに移動してやっていたが、一時間も経ったころ、道夫さんが近寄ってきて、手で上がれと合図した。水中眼鏡の中の目が陰しかった。樽に腹を乗せて荒い息をついていた直紀は急いで船に上がり、樽を引き上げた。スーツを脱ぎ、碇を上げると、道夫さんが低くエンジンをかけた。

「密猟じゃ、ナオ」

道夫さんの指さす方を見ると、三百メートルほど離れた赤崎のそばのハエの上で人影が二つ、三つと動いている。初めよそから来た釣り人ではないかと思った。近年の釣りブームで時にグレやタイの大物がかかるこの島にもやってくる釣り人は多い。しかし目を凝らすと、人影は黒っぽいスーツを着込んでいる。銀色に光っているのはアクアリングのようだ。中型のモーターボートの尻も見え隠れしている。

低くエンジンはかけたものの、道夫さんは船をすぐには動かさず、しばらくそのハエの方を睨んでいた。それから静かに船をバックさせ、ハエの方とは反対の方に舳先を向けた。

「三人おったな、ナオ」

直紀はうなずく。喉の奥がむずがゆい感じになって、唾を呑みこんだ。

「ほかにも潜つとる奴がおるかもしれん」

そのハエが島陰に隠れた所で停船し、道夫さんは無線で組合に密猟とその場所を知らせた。組合からはいつせいに操業中の船に呼びかける。待っていると十五分ほどで太一さんら四隻が集まってきた。光雄さんも一郎もいた。一人で乗っている船もあり、合計八人。「け

しからん奴らじゃ」と皆が息巻いた。太一さんの息子の義郎が威勢よく、「やったれ、いてもたれ！」と叫び、一郎も「ほうじゃ、ほうじゃ、どついたれ！」と意気込んだ。年長の太一さんを中心に話がまとまり、四隻でそのハエを急襲することになった。密猟だということのはつきりしたら、組合に連絡して、組合は海上保安庁と警察に連絡する手はずだ。

はじめは並んでゆっくり走り、途中から相手を威嚇するようにいつせいに機関音を上げた。舳先が威勢よく波を切った。戦いのようだと思つた。

密漁者たちのいるハエに近づくと、四隻はほとんどそれにぶつかる寸前でバックを使つて停止した。密漁者たちはすでにボートに乗り込んで逃げる準備にかかつていたが、逃すまいと四隻がボートを取り巻いた。四隻の機関音がグルグルと鳴り続ける。ようすを聞く他船の無線も時おり海面を流れる。少し睨みあつていたが、太一さんがメガホンをにぎり、ボートのウェットスーツのままの三人とふだん着の一人に向かつて、

「何しとんじゃ！ おまえら、どこの者じゃ。密猟してええと思とるんか！ 犯罪じゃぞ。おとなしいに捕まれ！」とどら声を上げた。島の者なら太一さんにそうやって一喝されたら誰だつて縮こまつてしまう。直紀は子供のころの島でよそ者の二人組の泥棒がつかまつた時のことを今でもはつきり憶えている。その間抜けな二人は、組合の前の広場に連れ出された本土から警察がやってくるまでの間、島の男たちにさんざんこづきまわされた。黄色い電灯の下で、酒でも入つていたのか、その時太一さんがまっ赤な顔をして、もう腰が抜けて泣いていた泥棒たちを威勢よく怒鳴りつけていた。子供心にもそれは小気味よい光景だつた。だが今密漁者たちは不敵に薄笑いを浮かべている。

「誰が貝獲つたんや。ワシら泳いどつただけや。密猟したという証拠あるんか！」

親分格らしい太った男が息巻いた。

「何ほざいとる！ ほれは何じゃ。アクアラングじゃろ。ほれが証拠じゃ！」

道夫さんが怒鳴つた。声が上がつていた。

「おう。そや。潜つとつたんじゃ。ほなけど、貝は取つてないわ。ちよつと魚と遊んどつただけや」

「ほな、そのキャビンの中、見せてみい！」

「ほんな必要ないわ」

密漁者はそらとぼける。

「おまえら、ちよつとハエに降りい。ワシらが調べたるけん」

そう言つて太一さんがハエに船を近づけ、舳先からとび下りた。光雄さんの船から一郎も飛び降りた。直紀も降りようとしたが道夫さんが、

「おまえは船を見とれ。ワシが」と制した。

「おう、おもしろい。降りたるやないか」と親分格は立ち上がった。岩に飛び移ると手に提げていたものを腹の前に構えた。水中銃だつた。島の男たちはその鋭い銚先を見て後ずさりした。もう一人の瘦せた男もボートの中で銃を取り上げ、薄笑いを浮かべながら構えた。直紀は頭の中がカツとした。同時に足元から震えが這い上がってきた。

「爺いよう。調べるんやったら調べてみい。ほれ、やれ。やれよ。どないしたんや！」

太った男は銃の先を太一さんの腹のあたりに向けたり、頭を狙ったりした。二人は二メートルも離れていなかった。漁師たちは目を血走らせていたが動けなかった。一郎が岩の上でへたり込んだ。船からでも身体じゆうが震えているのがわかった。男はその方を見て、

「おう、もらしとるんとちやうか、兄ちゃん」と言つて嗤った。一郎のズボンのあたりを見て他の男たちも嗤った。道夫さんが、

「やめえ！ おまえら、ほら脅迫じゃろ。船のナンバーもわかったけん、警察に捕まるぞ。やめんかあ！」と気丈に怒鳴った。銃の銚先は今度は道夫さんに向けられた。太一さんが道夫さんを後ろ手に制した。そして岩の上の二人に船に引き上げるように言った。

そのころにはさらに二隻三隻と島の漁船が集まってきたが、いたずらに現場を遠巻きにしているしかなかった。密漁者たちは悠々とモーターボートを発進させた。その前に、ほんとうかうそか、

「ワシは〇〇の〇〇組の者や。逃げも隠れもせえへんから、文句があつたらいつでも事務所にゆうてこいや！」と捨て台詞を吐いた。白波を高く巻き上げて漁船たちを尻目に飛ぶように走り去った。後で漁師たちはのしり、うなだれるしかなかった。

その夕方、家で食卓についた時も、直紀はまだ頭をしこたまなぐられた後のように放心状態だった。向かい側の、一升瓶を傍らに置き、コップを手にしたステレコ姿の父親が密漁事件のことを訊いた。今日は紀伊水道の沖に出て釣りをしていた父親は、港に戻つてからそのことを知つたという。しかし直紀はいつになくうつむいて、あいまいに答えただけだった。

「もってきてからずっとこんなんじよ。いったいどしたんかえのう、この子は」と、そばで母親が気づかった。

父親は直紀の気持ちを察したというふうには、

「ナオ、一々気にするな。放つとけ。漁師をしとつたらいろいろあるぞ。悔しうてもな、また次になんとかしたらええんじや。ほれでええんじや」と諭した。

食物もあまり喉を通らず、直紀は早々に自分の部屋に下がり、蒲団を延べてそこに突っ伏した。チクシヨ、あいつら、あいつら、と呻いたが、身体の震えがまたよみがえつてきた。涙がにじんだ。太一さんらはああするしかなかったのだとはわかったが、それよりも船でただこわばつて震えていた自分が情けなかった。モーターボートが去つたとたん、思わずへたり込みそうになった自分が恥ずかしかった。岩の上に降りていたら、自分も一郎と同じことだったろう。今日一日だけで自分が傷だらけになつたような気がした。詩作のことが浮かんだが、こんな弱い自分の書く詩など何ものでもないと思えた。湯川先生が浮かび、そして湯川先生もこんなふうには傷だらけなのかと疑つた。壊してしまえ、という誰かの声が聞こえた。ぶっ壊してしまえ、と心は応じた。

前島から燈台の方へ雲が早く流れている。南風が丘の上にある松林寺の松の古木の枝を揺すっている。台風が来そうだった。自宅の小屋で冬場に使うエビ網をつくろいながら、ラ

ジオの天気の新ースに聴き耳を立てていた直紀は、風の強まりを感じて浜に出てみた。掛け声が聞こえてくる。西と南の浜で、男たち総出の船の陸揚げが始まっていた。直紀も急いで走って行って加わった。港にいる船の一隻一隻にワイヤーをかけ、コロを使ってウインチで浜に引き揚げる。船が傾かないように一隻ごとに十数人の男が背中や肩で船腹を支え、何人かは丸太のコロの処置にかかりきりになる。声をかけ合い、力を要し、時間もかかる重労働だ。夏から秋へ、この作業は台風が近づくとたびにしなければならぬ。日暮れても電灯の光の中で作業は続いた。

夜の九時過ぎ、直紀はへとへとになって家に戻った。遅い晩飯をかきこむと、そのまま寝床に倒れ込んだ。

朝方、板戸に打ちつける風の音で目を覚ました。すぐ松林寺の鐘が鳴りはじめた。住職の井辻先生が風の中で打っている。小学校の補助教員でもある井辻先生の温顔を直紀は思い浮かべた。六つ聞き終らないうちに跳ね起き、そのまま外に飛び出して近くの堤防が上がって歩いた。瓦を抑えるために屋根に古い漁網を渡している家も何軒かある。波止場の方がざわめいている。連絡船が定刻よりは早く、これから本土の港に避難していくらしい。ちょうど拡声器からその出航時間を知らせるアナウンスが流れた。

郵便局の横手の日和山から延びている防波堤に上がると、とたんに潮を含んだ風に頬を打たれた。前島との間の瀬戸は一面、次々に寄せるうねりの波頭がもう白く崩れている。それは直紀の期待したとおりの景色だった。うねりは勢いよくあちこちの岩にかみつき、覆い崩れて泡立ち、あたりを白濁させている。海底深くに眠っていた龍が目覚めたように、海が狂いだしている、怒りだしている。直紀は荒々しい景色を喜んで、深呼吸した。その荒々しいものよ、自分の中に吹き込めと願った。そうすれば自分も一個の小さな龍だ。

半時間後、直紀は連絡船の上にいた。連絡船は半島の陰に入るまで、一片の木屑のように揺れた。小山のようなうねりに持ち上げられ、次には深い谷にすくい落とされた。二十トンの木造の船体は不吉にぎしぎしときしんだ。把手につかまりながら船尾に立って頭上よりもはるかに高く盛り上がった波の壁に對しながら、直紀は自分がどうしてここにいるのか、今から自分が何をしようとしているのかまだあいまいだった。でもそれはこの海のように奔騰するものにまかせておけばよいと思った。何かの意志はそのうちその中から、はつきりと躍り上がってくるだろう。

港に着くと直紀は駅まで歩き、ディーゼルカーに乗った。陸地は海の嵐がうそのようにまだおだやかだった。ただ空は一樣に暗鬱に曇り、時々小雨が車窓を濡らした。街に着くと、直紀はバスには乗らず、湯川先生のアパートに向かって歩き出した。アーケードの商店はまだまだ多くがシャッターを締め切ったままで、ゴミ収集の車が立ち止まって唸りを上げたりしていた。まだ朝の九時過ぎだ。先生が部屋にいるかどうかわからない。もう出かけたかもしれない。留守だったら帰ってくるまで、オレはいつまでも待つだろう。湯川先生、いや湯川祥子という女にオレは逢いにゆくのだという思いが直紀の胸を満たしていた。

一時間も歩いて、そのアパートにたどり着いた。そのころには陸上でも風は強まり、大粒

の雨も混じってきた。台風を遠巻きにして黒雲が早く流れている。傘はさしていたが、服も靴も頭もびしょ濡れだった。

アパートの下から見覚えのある二階の部屋を見上げた。高校時代、一度だけ湯川先生の部屋に招かれお茶をよばれたことがある。それから二、三度は、むなしくあたりを徘徊したこともある。カーテンは閉じている。鉄の階段を上る。部屋の前に立つ。こめかみに熱い血の流れを感じ、息が収まらない。ノックをする。答えはない。少し強くもう一度ノックする。部屋の中でかすかに人の動く気配があった。直紀は確信して、もう一度ごぶしを鋼板の扉にあてる。

「どなた？」とくぐもった声があった。

「直紀です。齋島の直紀です」

かすれた太い自分の声を、まるで太一さんのようだといぶかる。

「直紀君？ まあ、直紀君……ちよつと待っててね。汚くしてるから」

三分ばかり待たされて、直紀は中に入れられた。

「まだ寝てたのよ。昨夜夜更かししてしまつて。ううん、もう起きるところだったの。……どうしたの？ 急に。外は台風でしょ。まあこんなに濡れて。そうね、バスタオル貸してあげるから、まず拭きなさい。……今朝島から出てきたの？ 大変だったでしょ。まあ、そこへお坐りなさい。コーヒーでも入れるからね」

湯川先生の顔はいつものようにくつきりとしては見えなかった。地味な青いワンピースを着ている。窓のカーテンが開かれて明るくなった。流し場に立ちながら先生は、「どうしたの？ 何かあったの？」ともう一度訊いた。

「別に用はないんです。ただ荒れた海を見ていたら、先生に会いたくなつたんです」

「こんな嵐の日に？ そう。変なのね。でも嬉しい」と先生は笑った。

中仕切りの襖は開けられていて、キッチンに続く部屋も見渡された。壁に沿う背の高い本棚に窓際の机、それに片側には壁に寄せて簡素なベッドが置かれている。前にここに来た時、若い女の部屋にしては質素だという感じがした。高校時代の洋子の下宿は狭かったがもっと派手に装飾していた。

食卓の椅子に掛け、出された熱いコーヒーをすすっていると、まだ直紀の服から水がしたたり落ちていたのを見て、

「直紀君、やつぱり着替えなさいよ。いくら君でも風邪を引くわよ。男物も少し置いてあるから」と、先生はシャツやズボンに新しい下着まで出してくれた。坂口さんのものだと思うたが、直紀は「すみません」と言つて言われる通りにした。襖の陰でバスタオルで身体を拭き、それらを身につけるといくらかさっぱりした。

先生はまた流し場に立ち、朝昼兼用の食事をとるからと言つて直紀の分も作ってくれた。トーストを焼き、ポイルドエッグを作り、冷蔵庫から取り出して野菜も刻んでいる。ずいぶん迷惑をかけているなと思いつつも、直紀は幸せな気分だった。外は風雨がさらに荒れていくようだった。

食事の後はテーブルをはさんで二人で話した。先生は書架から好きな詩集や外国の小説を取り出してきて見せてくれた。勤め先の学校の話も聞いた。もうすぐ学校が始まるこの時期が毎年憂鬱なのだと言った。「かーまる」の島での合宿の話も出た。ああ、そうそう、その時の写真ができてきたのよと、写真屋から受け取ったままの袋を持ちだしてきて直紀に見せた。直紀はそのうちの自分の写っている数枚をもらった。先生は直紀のおかげで齋島ではほんとうに楽しかったとくり返し礼を言った。でもあの小さな浜でのことにはふれなかった。

そのうち吹きなぐりの雨が窓を打ちつけてきた。先生は雨戸を閉めて部屋の電気をつけた。直紀はもう辞去しないといけないと何度も思った。しかし、外の嵐のためではなく、なかなか言い出せなかった。幸い先生は迷惑がるそぶりもなく、外はこんだし、今日は半日も直紀に付き合おうというかまえた。

何度目かに風雨の音が高まった時、直紀は手を伸ばして湯川先生の腕をつかんだ。自分の中に、今朝通過してきた荒々しい海が息をしていると感じた。

「直紀君」と先生は心持ち目を見開いて笑顔を収めたが、それからもう片方の手をテーブルについて視線を落とした。何かをあきらめていくような表情だった。立って引き寄せると先生の身体はたやすく傾いてきた。唇を重ねた。冷たくてかさかさしていたが、それは自分のせいだと直紀は思った。香水のいい匂いが薄くした。先生は抱かれながら、

「いいわよ、直紀君。抱いて。海の男と、私もしたい。好きだよ」

まっすぐ直紀の目を見て言った。身体を離してゆっくりベッドのところに行くと、後ろ向きにワンピースを落として白の下着だけになった。そして先にベッドに横たわった。身体を重ねても今度は先生の両手は拒まなかった。ゆっくり下着を剥いだ。荒々しいキスになった。首や胸に口を押しつけ、両腕で身体を締めつけた。嵐が身体の中をめぐるっていた。不器用に腰を強く押しつけるだけだったが、指に導かれて体の中に入った。喘ぎ声が洩れ、身体をしなわせるのを直紀は誇らかに見下ろしたが、自分もにわかになりつめて果てた。

二人は長い間狭いベッドの中でそのままいた。湯川先生の身体は思ったよりも華奢で、胸も小さかった。洋子の弾むように張った身体とはちがうと直紀は思った。でも白くてやわらかく、皮膚がしっとりしてこまやかだった。その上に置く自分の荒れた手や指を直紀は気にした。二人は何度か抱き合い、眠り、窓の外が風雨のさらに募るままに暮れていったのにも気づかなかった。二度電話のベルが鳴った。一度ノックの音がした。坂口さんのような気がしたが、湯川先生はどちらも放っておいた。

「ね、今日はこのまま泊まっていきなさいよ。外は嵐なんだから」

湯川先生の中にも荒れ狂う海があるのだと直紀は感じた。

「今ごろ島はものすごいでしょうね。私がいた時も大きな台風があつてびっくりしたわ。宿舍が揺れて空に浮き上がってしまうようだった。怖くなって同僚の先生と風雨の中を学校の体育館に逃げたのよ。途中の道で、分厚い板切れが紙のように舞い上がって飛んできて危なかった。屋根瓦が飛んじやった家が多かった。すぐそばの家は、屋根に大きな穴が開いて

しまつて」

暗い夜に、島の防波堤に打ちつけ、高く越して流れていく波しぶきが見えた。家々の上や路地を、白い風の筋が縦横に走っている。巨大な龍が海から闇の空に躍り上がって咆哮しているのだ。いつかあれを詩に書きたい、オレの言葉で捉えてみたいと直紀は思った。

海面を透過した光が無数の矢の筋となって細かく揺れながら水底を突き刺している。直紀はまた異形の魚になって逆さまに落ちていく。海面の波の動きに合わせて水底の岩や石の上でも光の模様がやわらかに踊っている。岩に着いたアラメが水の動きのたびに大きく揺れなびき、その間や上を大小の魚がゆっくり泳いだり、海藻をついばんだりしている。神経質に警戒しながら体のすぐそばを通り過ぎていくイワシの稚魚やコアジの群れ。岩場や石の下にはカニもエビもタコも、貝も隠れている。タコやイカの幼魚は半透明の白いゴミのようだし、プランクトンは光にきらめいてもっと細かい。海は陸上以上に命の世界なのだ。波も命だし、岩も生きている。そしてなにもかに統御されているようにゆるぎない統一がある。この海の中の靈妙な無数の命の世界をほんとうに知っている地上の人間がいったい何人いるだろう。命の故郷はたしかにこの海にちがいないのだと直紀は思う。この海の中で動物も植物も生殖し、生まれ、育ち、時に闘い、死ぬ。そしてまた無数に生まれてくる。

岩肌からノミで剥がしたアワビを手にとってガラス越しに見つめる。くねくねとうごめくアワビの身が、今日はふと女陰らしく見えてしまう。

昨夜洋子の身体に初めて自分を入れたのだった。

「ナオ、もうええから、しまいまでして！」と洋子の方が迫り、直紀も挑むつもりになった。挑むのは洋子の身体にはない、何ものかにだ。自分を自分の中に閉じ込めている何ものかにだ。そこを撃てば自分も世界も変わるかもしれない。線香のにおいのする月明かりの中で、固くなって横たわっている洋子にゆっくり挿入した。そのまま腰を動かしているうちに昇りつめ、なんとか引き抜いて洋子の腹の上に出した。月が観客の、かんたんで奇妙な儀式のようだった。

「ああ、ウチもこれでようよう大人の女になれたわ」と、身じまいをした洋子はさばさばと言った。

「ナオ、これからも仲ようしてな。浮気したら承知せえへんけんな」

息が苦しくなつて直紀は足ヒレで海底の重たい水を蹴る。上るにつれ、八方から圧されていた身体がしだいに伸びていき、海面から肩まで飛び出し、俎板の上の魚のように鼻や口を大きく開きあせて空気をつかまえる。浮かび、獲物を樽の下の網袋の中に落とす。そのまま樽に腹を乗せ、抱え、目を閉じ、もう死人になつたつもりで身体じゅうの力を抜いてみる。たちまち頭や背に裸の光の矢が刺さってくる。海に抱かれ日に焼かれながら、寿命の尽きた魚のようにもうこのまま死んでもかまわないと思う。死んでもまた海は生き返らせるのだから。気分がよかつた。

「ナオ、どしたんじゃ！ しんどいんか！」

少し離れた所に浮き上がったらしい道夫さんが怒鳴っている。島を揺るがすように、ドド
ーッ、ドドーッ、と、大洋からのうねりが島の崖にぶつかり跳ね返る音が海抜ゼロメートル
の面を死神の足音のように走ってくる。